午前七時、深大寺はコーヒーショップいっぶくの裏庭に次郎とマキ、クロヒョウとケンジにヒマの5人はコーヒーで乾杯、見送りはガキさんとまりの二人、まりは火打石をカチカチさせる。

サア一行こうかと次郎は発した、皆はオスツと言い、サイドカーにミニに乗り込んだ。

「皆に言っても無駄かと想いますが無理しないように」

と、まりが言った。

「いや、無駄じゃーないよ小生なんぞ危険と想ったらすぐ退散や」

と次郎が言った。馬鹿言ってるじゃーないよと言った表情で、まりはコーヒーカップを回収する。

「中央道利用で、富士河口湖町の厚生労働大臣北畠善三の別荘を目指す。休憩場所はBMWの二人に任す。」

「じゃーまりにガキさん、行ってくる後は宜しく」

と言いつつ次郎達は、快適なエキゾースト音を残し、まりとガキさんの視界から消えた。平日の朝は中央道はトラックが多い、渋滞とは言えないが程々の量だ。小仏トンネルを出た所で前後の感覚が空く様になった、談合坂でコーヒータイムしようとマキが言って来た。次郎は一言OKと言ってスマホを切った。サービス内は意外と混んでいる、辺りをキョロついていたが、ケンジがここだここだと奥で手招きしている。五人はこれから何が起きるか、何がどうなるか不安ではないのか、誰一人として口には出さん。世間話と言うか、フアッション、ETC等々、何時ものように次郎とケンジは、マキとクロヒョウに振り回されっぱなし。二人の青年が次郎達のテーブルに近寄って来た。

「僕達は東京のN大学生です、山中湖へ遊びに行く途中です、あのサイドカーと一緒に、お二人の写真を撮らせて下さい、無論僕達と一緒にの所も」マキは指を丸めてOKサインを出した。

「コーヒータイム終わったら行くから、サイドカーのところでまって」それを確認し、大学生は次郎達のテーブルから離れた。これから大仕事だ。つちゆうの二人はピクニック気分、次郎とケンジがいるつちゆうののに、ナンパされてルンルン気分、次郎はモー、牛気分。

二人に取材中の制服は支給しておいた、がそれ以外は二人に衣装の規定は言っておらん、今日は人目をひく、目いっぱいいな衣装だ。

水温んで来た今日、早く言やー必要以上に肌を露出せし出立だ。いや応でも、個々の目に止まってしまおう、楽しませている。マキとクロヒヨウは言われるままポーズをとっている、ヒマも負けじとモデルウオークを披露、時にはマイケルムーンウオークを交える、何時しか人垣が出来てしまおう。頃合いを見計らい、五人は逃げるように談合坂を後にした。

BMWとミニは大月インター左折し河口湖方面へ入った。都留を過ぎた辺りでシャコタン車が、異様にBMWに接近し始めた。クロヒヨウは動じないがシャコタン車が右に左に、そしてBMWの前後に、他車がその動きに巻き込まれそうになる。暫く続く、次郎はマキに電話を入れた。

「他車が巻き込まれそうで危険だ、次の谷村PCへサイドカーを入れろ」次郎の電話が分かったと見え、マキは手を挙げた。クロヒヨウは側道へ入り駐車スペースへBMWを止めた。シャコタン車はBMWの周りをグルグルと回り始めた、3人乗車している。5、6回まわった所で車を止め降りて来た。

半グレにも見えるが街の、悪ガキと言ったところだ。

「よーおねーちゃん、俺達と遊ばない良いことしない」

と言いながら、クロヒヨウに言い寄って来たが、クロヒヨウは動じない、パツセンジャーシートのマキにはメット上を撫で始めた、その手が胸に下がって来た。何にすんでとばかりに、マキはその腕を払いのけた。それが引き金になってしまった、3人組は、

「ねーちゃん良い度胸強いやないか、俺と差出で勝負や降りてこいや」マキは渋々ながら降りメット脱ぐ、拍子にメットの中に丸めてあつた黒髪がさつと流れた。大将格が言った。

「マブイやないか俺達と一緒にいい事しに行こうよ」

と言いながらマキを抱き寄せようとした、強烈な肘鉄をくらわした。

「このアマ、俺と勝負すんのおかえ、と言いながら身構えて。クロヒヨウが言った。

「あんたの敵じゃーないよ辞めときな」

「しゃらくせー」

凄味が増してきた。マキはY字バランスから回転を加えI字バランスに入つた。

「マキ、その位の回転にしときなこの細いのばらけちゃうよ」

幾分回転が弱まったかと同時に、I字バランスから、スーツと脚が出て大将格の胸をヒット、悪ガキは1間半程飛ばされ、大の字にのびた。それを目の当たりにした他の2人は顔を見合わせ、どーしようと言った表情。

「こんなとこで寝かせたんじゃー往来の邪魔だ、早う片付けんかへ」

マキの言に2人はおどつきながら、大将格を引きずりシャコタン車に乗せ、立ち去ろうとする。

「あいや待たれ」

再びマキの言に2人はギクツとし固まった。俺達にもあの蹴りを喰らわす気なのか等々落ち着かん。

「安心せいモー蹴りは出さんよ」

2人はキョートーンとしたままだ。

「帽子の忘れ物がある、あそこに落ちている」

「大将の所有物だ」と言いながら拾い、タイヤの軋み音と共に3人は消え去った。

マキは少し離れた所に停車しているミニに向かい、敬礼した。次郎は親指を立て、先へ行こうの合図を送る。BMWとミニは、河口湖インターを出てR139を右折、大型ショッピングセンターが、建ち並ぶ快適な道路が続く、特産物販売店だろう簡易な建物が所々に、次郎はマキに電話を入れる。

「この先に、日帰り入浴可能な道の駅がある、そこに入ってくれ」

「キャットホー温泉だ堪らんでよ次郎」

「ばかたれ！薬物売買、闇献金受け渡しが実施されていると想われる、現場まで後僅かだ。その道の駅で最終確認をする、マキ分かったな」

クロヒヨウは、R139を快適なエキゾースト音を響かせ、BMWを走らせる。暫くするとクロヒヨウは、大きな道の駅看板の所を左折し駐車場に入った。平日のせいか空いている、次郎は茶封筒を持って、いきなりドンパチもあり得る」

「ピポン」

「そんな時はどうするの」

「皆の判断、皆に任せるしかないが総合的判断も必要、ケースバイケース、そんな時は小生流に小生が判断する」

そうかいつもの事だねとマキは言い、ケーキを頬張った。次郎のサイドポケットでルパン三世が喚いた、まりからだ、予測してたとブツブツ。「今何処にいる、三鷹署村上捜査課長さんから連絡が入ったよ、その少し前に今何処にいるんだ、と警視庁特殊隊の樽沢隊長さんからも電話があった、ねー次郎何処にいるの皆元気なの、村上捜査課長さんの話では、警視庁捜査1課及び3課も、次郎達の動きに併せて東都地検と六本木ビルに、極秘ながら、突入態勢を整えていると言っている。」

「まだ、現地に到着できていない、自分等の動きを察知されては警戒されてしまう、目的は達成できなくなってしまふ、静観するよう要請しておくれ。必要ならば関係各署には小生から連絡す」

「分かったから、ちゃんと連絡とってよね、マキちゃんとカナちゃんには危険な事はさせない様に」

「相分かったそーする」

何時も返事は良いんだから、モウとまりは牛鳴きし電話を切った。

「一課長さん次郎です」

と電話口で言った。

「おお次郎さん村上です」

と電話口で返って来た。

「ところで次郎さん、察しはついているがと、前置きしてお聞きします」「いか様な事で、チームいっぷくは後数分で、北畠善三の別荘に到着する、何か要望でもあれば」

「今朝、マキは早くいなくなるし、爺様は年甲斐もなくそわついていた。朝食時、爺さん如何したんだい、そんなにそわついてと聞いた、次郎さんとマキ達は北畠善三議員の別荘に向かった、マキのやつ一丁前に確かなる証拠を掴んだ、富士山へ行ってくる。父っ様には上手く説明しといて、と言ひ残し飛び出して行った。と爺っ様は説明する」

「で、村上一課長さんはどの様に」

「本庁でも確信は取れず仕舞い、苦虫を潰した顔ばかり、そんな時、次郎さんが動いた、と三鷹署は無論、本庁は大騒ぎと相なった。取り合えず三鷹署で、特別搜索隊を編成し次郎さん達と合流せしとお達しが出た、因みに本隊は中央道都留付近を走行中、搜索隊が到着するまでは不用意な行動は慎むように」

「了解、小生は了解するが若い女性が三人いる、制止も聞かず行動し兼ねない、早い到着を待つ」

「了解、後二十分もすれば合流可能、別荘付近で待機されたし、それと別荘内にはダイナマイトや煙火が、持ち込まれているとの情報もある、注意されたし」

「了解、マキとカナが痺れ切らさん内の到着を待つ」

「それから次郎さん、山梨県警と山梨消防署へも出動命令を、本庁経由で出した。警視庁特殊隊にもだ、オオタカがヘリポートを発ったと連絡が入っ

た」

そうこうしておいたらチームいっぷく隊は、段差下に到着した。マキが早速段差下より顔をそーつと出し別荘を伺った。

「次郎、ライフルを持った男が二人うろついているよ」

「マキ分かったそのへんにしとけ」

「次郎今度は黒塗りのセダンが入って行くよアッ、又一台」

「ライフル持った男に見つかるなよ待つんだ、作戦は開始されておらん」村上捜査課長から電話入った。

「着いた、次郎さん達は何処にいる」

「71号線を約5km進んだ所でトの字の脇道がある、砂利道だ。そこから200m行った所に我々は居る、大型輸送車はここまで入ってしまおうと気づかれおそれあり、トの字交差点辺りで待機するように」

数分して村上捜査課長が3人の刑事と共に到着した、軽く敬礼し合流の挨拶を交わす。小生等が掴んだ情報によればと、次郎が説明を始めた。

「今日、大麻とシヤブの取引が決行、闇献金授受が」

と次郎の言に3人の刑事は頷くのみ。

「で、次郎さん達の予定の行動はどの様に」

と刑事の一人が聞いてきた。ヒマがピクニック気分か、携帯湯沸かしセツトで、コーヒーを淹れ皆に手渡す。皆が一口した所で次郎がしゃべりだした。

「二人が裏手に廻り安全を確保する、多少のドンパチはあるかも、そこを抜け建物の横両サイドに一人づつ、サイドに待機出来たらOKサイン、今度はここからあの2丁のライフルを狙い撃ち、サイドにいる二人がライフルの確

保、それを合図に突撃開始、別荘内に行員が人質になっている筈だ、皆で救助に務める。拳銃使用も多々ある筈だ。突撃の際はガードを忘れんように、大まかで言う以上だが」

「次郎さん誰が裏手に回り誰が狙撃手」

「警視庁特殊隊、榎沢隊長が来てから相談する」

村上警部の電話が鳴った。総監の島原の声で村上警部は固まった。水上君私だの声に我に返る。

「平常に戻ったようだな、指示を出すよく聞いてくれ」

「で、なにようで」

「難しい事ではない、人命が第一、北畠議員の別荘に行員が三名居るとの情報が入った。直ちに河口湖別荘人質救出対策本部を設置し、対策本部長として人質の救出に尽力されたし。及び予てからの噂されていた麻薬取引、闇献金授受が別荘で決行模様、直ちに真相を把握すると共に事実とあらば突入し全員確保せし、尚拳銃を多数所持している、突入の際には防弾チョッキ、盾を持参し安全に勤めよ、東都地検、六本木ビルには特捜隊と捜査一課三課に待機命令を発動した。突撃命令はそっちの状況を見、本部長が行う事、今んとこ静寂しているようだ、が榎沢隊長を始め特殊隊員を乗せたオオタカが、爆音と共に到着すれば、敵さんは大騒ぎになり、やたらとぶつ放し始めるだろう、その時から勝負だ以上」

村上警部は宙を見ながら了解したと敬礼する。

マキがボソボソつと言った。

「家じゃー炊事洗濯まるつきしダメ、掃除片付けもダメ、それがこんな大事

件の本部長だなんて、勤まるんだろうか」

傍らにいた次郎が言う。

「マキ、お父さんをそんな風にいつちゃー遺憾よ、水上家のお父さんは知らんが所轄を始め、本庁では警部警部と慕われ尊敬する署員が多い。立派に職務を遂行される筈だ、マキも本部長に協力してやってくれ」

次郎の怒り気味に言う説に、マキも女の子だしゆんとする。

山間の空にダークグリーン物体が、爆音と共に近づいて来る。警視庁特殊隊のオオタカだ、我々の上空で旋回を始めた。別荘前庭で二人、ライフルを発射させる。段差下の僅かな窪みにオオタカが着陸出来た、ライフルは泣き止んだ。オオタカには十二名が搭乗していた、皆突撃に控えてか重装備だ。樽沢隊長が到着挨拶に本部長と次郎の所に来る。

「総監から指示がありました、何なりと申しつけ下さい」

本部長と次郎はヤーと手を挙げる。

「敵様は我々がここまで来ていると気づいている、隠れている必要はない。声の届くところに居たほうがいい、小隊を段差下まで進むよう指示して下さい、来た所で小隊長をここに読んで下さい」

向井崎小隊長、柏崎副隊長と数人の隊員がパイプ椅子持参でやって来た、円を描くように並べる。ありがとうございますと次郎は礼を言った。向井崎小隊長が挙手し話す。

「我々小隊は、村上本部長に従うよう指示されています。何なりと仰せつかわさい」

一瞬隙間があり。

「りっりようかい」

と、慣れんのだろうか、村上警部は喋りにドジってしまい、皆の口元が緩るんだ。山梨県警機動隊第一隊到着、と大間隊長が輪に加わった。僅かして山梨消防隊のポンプ車二台と救護車三台が到着、これで予定隊は全て終結した。十分後各隊の隊長と副隊長はここに集合、本部長の威勢のいい声が響いた。ケンジにマキとカナ、ヒマは緊張が解れたのか談笑をし、其々に体を動かしている。次郎は二杯目のコーヒーをヒマに頼んだ。隊員らは比較的平らに場所を選び、簡易テントとディスクを運び通信機器をセットす。誰が用意した河口湖別荘人質事件対策本部の看板、テントわきに建て掛けた。

時間だ各隊は本部に終結す。本部長を真ん中に榎崎隊長と次郎が両脇に着席し、相対すように正副隊長が座りチームいっぷくは最後列に着席した。「我々は人質の安全、救出を第一に考慮し別荘内の犯人等に、人質解放を呼びかけに行く、別荘内には六本木ビルに本拠地を置く凶悪グループ三十五人が、銃や刀剣を持ち込んでいるとの情報もある、ここはライフルでの狙い撃ちも可能、普段の移動の際にも注意が必要、ダイナマイト、煙火も多く持ち込んでいると言われている。

厚生労働大臣北畠善三議員も別荘内にいる、失敗は許されん心して対処するよう。付け加えるならこっちの状況を見て、東都地検と六本木ビルに突入される。以上、質問は」

山梨県警機動隊の大間隊長が手を挙げた。

「人質解放説得を不発に終わった場合は如何とす」

「複数回説得は行いそれでもであれば、突入を考えている。警視庁の元、名

刑事次郎さん、警視庁特殊隊の榎沢隊長もいる、ベターを協議し行動する、がその方法は青写真作成中、他になければ三十分後に一回目の人質解放を行う、その時は皆集まってくれ、解散」

マキは父っ様が的確且つ、テキパキとした指示に、あっけにとられた表情だ。隊員らは皆なれたもんだ、思い思いに時を過ごしている。三十分は直ぐ消化され招集がかかった。村上警部はジュラルミン盾と共に別荘と相對した、すかさず二か所から銃弾が襲い掛かって来る、盾に銃弾が鈍い音を奏でる、警部は怯まずメガホンを向け話しかけた。対策本部長の村上です、我々は別荘を包囲した、直ちに人質を解放し投降して下さい、ライフル弾が容赦なく襲ってくる、が本部長はなおも投降を呼びかけた。一向に投降の気配なし、榎沢隊長が言った。

「相手を活気付けるだけだ、本部長ひと先ず引こう」

と言った矢先、遠くながらヘリの重なる音が聞こえてくる。数機が確認できる報道各社のヘリだ。

「榎沢隊長はオオタカの無線技師に指示した、現場の状況を説明し、報道管制を引くように発令す、71号線よりここに来る途中の追分に、広い平地がある、そこで待機するようにと、各機より了解の旨が入る。幹部が本部に集まった、ヒマがコーヒを淹れ、マキとカナと皆に配った。

「次の説得で何か要望でも言ってくれと伝えたらどうか」

本部長が言う。

「それも良いかもしれんな、可能と想われる事は採用し方が良い」

山梨県警機動隊大間隊長が言った。

「今は陽は高いし行動するには十分な明るさだが、ここいら辺は陽が落ちたら真っ暗闇だ、月でも出ればいいんだが、そんな訳で陽のある内が勝負と想う」

「後十五分で二回目の説得に入る」

本部長は皆に告げた。次郎は布石とでも言おうか或るは何か策があるのか、対策本部が設置されてからは、皆と同様に動き回ってはいるんだが口を開いてはいない。マキが気になったんだろうコーヒーを運びながら次郎に言った。

「次郎、どうしたの元気ないね」

「今回の事件の背景は、何かを自分に問っていた」

「皆が調べてくれた、それでいいんだが、一つは北畠善三大臣、これは闇献金と薬物授受はその通りで、が頂点が見えてこない。東都地検の秘書室が関わっているまででその上が見えない。はたして検事正まで行ってしまおうだろうか、その場合に検事正は何処まで関わっているんだろうか、全てなのか」

「次郎、弱気になって次郎にしては珍しいね」

マキが次郎を覗き込んだ。

本部長の説得は三回目となった、が以前膠着状態。

「村上警部、各部署の正副を至急本部に、集合させてくれ」

と次郎が言った。

伝言が走る、部署によっては次郎が動いたと騒いでいる。無理もない元名刑事の采配を目の当たりに出来る、こんなチャンスは二度とない、山梨県警隊員らは本部席近くに陣取った。

「皆、老いぼれの策として聞いてくれ、質問は後でまとめて聞く、では作戦

を説明する」

皆はどのような作戦か固唾をのんだ。次郎はホワイトボードの前に立った。「小生達、チームいづくが掴んだ情報をもとに小生等は、ここに来作戦決行と相なった、が思いの外、敵は大きい。ここに来る途中そんな事を考えていた、小生等の行動を三鷹署は掴んだ。山梨県警まで及んだ、小生等の行動を理解し賛同されている、頭が下がる思いです。相手はライフルと拳銃の所持者、小生達だけでは如何なったかは不明、正直のところ皆さんが来て頂けたんでホツとしているのが事実です。で、作戦を発表する」

次郎はコーヒーを一口しマジックを持ち、ホワイトボードを背にした。「説得を続けても一両日経っても解決できんだろう、長期戦もあるが東都地検と六本木ビル突入を控えている、突入を察知され証拠隠滅もある、何時までも待機はさせられない。と言って於いて本題に移る、相手は三十五人と予想する。ここからも分かるように別荘は一階建て、距離100m、別荘を中心に半径50mの所に、高さ5mの塀が張り巡らされている。正面からの突入は考えていないと言うか無理、ではどうするかと言うと、遠回りして裏手に回り柵を乗り越える。当然ここに少人数ながら見張りはいるであろう。裏手に回った隊員はその始末に当たる、任務が終わったら建物両サイドに分かれ、他に悟られんよう、本部に完了の合図を送る。それを合図に本部よりライフル二丁を打ち落とす、と同じして本部長は各隊に突撃命令を出す。両サイドにいる隊員四名は来る間、人質の行員三人と運転手の三人の安全を確保に努めてくれ、同じして凶悪犯グループと対峙し制圧に努める。この時突撃隊は拳銃使用に十分注意されたし、併せてジュラルミン盾を使用。小生は

老いぼれにて突撃はご容赦、樋沢隊長と本部長は指示並びに連絡もあろう本部で待機。全体を把握し判断し東都地検と六本木ビル突入の指示」

本部長の力強い敬礼が返って来た。マキが無言で父っ様のそんな仕草を見ている。

「山梨さん、救護車と消防車をこの段差場所に移動させて下さい、消防車は直ちに放水可能に」

了解の返事が其々にした。三鷹署の皆さんは車両を同じく段差に移動する様に本部長、マスコミさんには一機だけへりを許可すると言っていて下さい。これで指示は終わったかな」

マキが自分たちはどうすりゃー良いんだと次郎に食って掛かった。山梨県警はマキ達との作戦は初めてだ、遠巻きに二人の成り行きを見守っている。

「おおーゴメン大事な事を忘れていた、マキとケンジは特殊隊員と一緒に裏手に回り、見張り役等を蹴散らしてくれ、クロヒョウはあの二丁のライフルをここから狙い撃ちし、弾き飛ばせ」

マキが言い出した。

「ケンジとクロヒョウは執行猶予中だ、どうするんだ」

父っ様の制止を聞かずマキはしゃべった。

「その責は小生にありだがカナとケンジ、降りたければ降りても構わんぞ」

次郎のその言葉に二人は固まったが、二人は顔を合わせ互いにこっくりした。

「今の自分等のゆく道は次郎さんに就いて行くしかない」

と言い二人は次郎に向きキツと視線を投げた。

本部長は、黒白の道着の様な物をマキとカナにヒマに渡した。

「これは三鷹署を出る際、三人に渡してくれと北野流道主、村上一太郎さんより預かって来た」

と本部長は言う。マキは白地に背にマルに上の字、襟には 村上水軍と入っている。一方カナは、黒字に背には今にも獲物を狙うかの様なクロヒヨウが、襟にもクロヒヨウマークが入っている。

ヒマの襟は日葵と入り、背は丸に一の字が、三人は早速警備車の中に入り着替えた。出てきた三人を見一同は、おっおっーと声を上げる。道着と色違いなタスキを手早く鉢巻をする。よし出来た、爺っ様行ってくるぜとポイントと脇腹を叩いた。マキと特殊隊員は迂回しながら別荘裏手へ進んだ、段差下では皆はその時を待つが如くりラックスしている。榎沢隊長がカナにライフルを渡した、久し振りなのかカナは感触を確かめる様、とつかえひっかえしライフルに触った。銃弾のケースから実弾を二発取り弾倉に込めた。

「クロヒヨウ、二発でいいのか」

と隊長が言う、

「二つの目標に三発以上入らない」

とカナはきつぱりと言う。山梨県警隊員は始めてみる光景だ、遠巻きながらも耳をダンボにし、身を乗り出すようにし、成り行きを見守っている。カナは時計を見た、マキ達が別荘裏手に向かってから十分が過ぎようとしている。気を落ち着かせようとするのか、♪ゆきーはしーたかーらまいあーがり、隊員が枯れ枝を二本探しステック代わりにし、護送車ボデーで拍子を取り始める。ゴーゴーレツゴー、チャチャチャークロヒヨウと、皆もを張り上げ、体

で拍子をとっている。隊員のステック持つ手に力が入った。その時榑崎隊長の声が響いた。

「合図が入ったクロヒヨウ頼む、首を縦に振ったと同じして銃声が二発鳴った。宙を舞う二丁のライフル。それが確認で来る。それを合図かの様に別荘前に三十数名が出て来る。

「あの数では、マキさんやケンジさん、二名の隊員が危ない全員突入」

本部長は指示す。

「オオタカは上空より援護せよ」

榑沢隊長の指示が飛ぶ、山梨県警も突入すべしの部隊長より出る。カナがライフルを榑沢隊長に預け、ジュラルミン盾を小脇に別荘に向かう。

「全部署突入せよ」

と本部長が再三メガホン越しに叫ぶ。特殊隊は手早かった、突入から五分と経たん内に、榑沢隊長に人質六名の安全確保と入った。

クロヒヨウが、親の敵とばかりにパンチパーマ男に突っかかった。

「このアマは俺がやる皆手出しはすんな」

と首領核の栗橋健明は言う。

ケンジはそれを聞いた。

「クロヒヨウ、俺も手出しはせん、しっかりやってくれ」といいその場を発った。

「あんたか、自分の親をやったのはお前だな」

「そうだとしたらどうする」

「親が受けた分を返してやる」

「ふっふっふー出来るかな返り討ちしてやる」

と良い終わるが早いか右拳がカナの左を掠める、が素早くその腕をとり一本背負い。

「味な真似をするじゃーねーかおねーちゃん」

と、パンチパーマは言う。

「まだ序の口やで栗橋さん」

些か焦り気味になったが、立て直し今度は蹴りできた、ヒョイと後ろに下がって交わす。

マキが拳銃と立ち向かっている、木陰に伏せたり跳び跳ねし銃弾を交わしている。隊員其々に受け持ちを熟し後は、栗橋と北畠善三厚生労働大臣二人だけとなった。が、あると思われているダイナマイトと煙火は依然として見つかっていない、薬物と現ナマは書斎奥より大金庫が発見されている、その中に入っていると思われる。カナも蹴りとパンチを数発くらい動きが鈍り気味、屋根からは拳銃でカナを狙ってる。パンチパーマも動きが鈍っている、カナがパンチを浴びせようとルーティン、と同時に屋根から銃弾が右頬を掠める。

ケンジが板を丸棒に乗せる、マキにここに乘れと指示、ケンジは隊員二人に声をかけ板に飛び乗った。シーソー宜しくマキは跳び上がり、回転しながら悪党の背に降りた。一撃を食わせる、悪党はもんどりうって落下する。ダイナマイトと煙火が、依然として見つからんと、特殊隊より本部に入った。

「必ずある天井床下等メンバーを変え探せ」

部長は言う。別荘横手より、林方向に逃げる人影が、マキが察知し追いか

け捕まえた。大きなバックを三つ持った北畠善三厚生労働大臣だ。

「そっちは林に通じ藪だよ」

と、マキが声をかけた。大臣は慌てふためいた表情でいう、

「こ、これは俺の金だ誰にも渡さん」

マキは、これが偉い議員さんの、慣れの果てかと言った。

「相分かった、あんたのお金はあんたが運べばいい、あそこの灰色のバスまで運んでくれ」

マキは偉い大臣さんに言った。北畠厚生労働大臣は、三つのバックを大事そうに抱え、よろけながら歩を進める。

「これが金と欲にあふれた慣れの果て」

とマキは言い見つめている。

北畠厚生労働大臣確保を確認したところで、本部長が日葵を呼んだ。

「ヒマちゃん仕事だ頼むぞ」

何か分らず仕舞いだが、ヒマは本部長脇に来た。

「私の言う通りに、各部署に指示を出してくれ、行くよ」

日葵は緊張めいているが確りと、はいと返事する。

「こちら河口湖別荘人質事件対策本部と繰り返す。こちらは本部対策広報です、北畠厚生労働大臣を確保した。直ちに東都地検と六本木ビルに突入せよ、繰り返す直ちに東都地検と六本木ビルに突入せよ」

各捜索隊は待ってましたとばかりに氣勢を上げ突入した。特捜隊福原副隊長を始め、五人の特捜隊員等をトップに、捜査員が続き秘書室を目指す。秘書室へ雪崩れ込んだ。

「一体これは何なの」

と室長の村井瑠璃子が叫んだ。副隊長が薬物取引、闇献金、不正不動産売買等々が記されている捜索令状を室長に示した。

「何の事だかさっぱり分かんない」

「河口湖で北畠厚生労働大臣や側近がしゃべった。副隊長は捜査員らに捜索開始を宣言、これまでと思ったか村井瑠璃子は前屈みになると、スカートの中より赤いバラの入れ墨の入った太腿から、小型拳銃を取り出し捜査員へ向けた、それよりも早く特殊隊員の銃が火を噴いた。室長の手から小型拳銃が吹っ飛んだ。

「モデルでも通用する容姿のおねーさん、おねーさんにはこう言う物は似合わんよ、こいつは俺が預かっておく」

副隊長は隊員二人と僅かな捜査員を連れ検事総長室に向かう。

総長室の机に凭れ掛っていた。俺を誰だと思っているんだ、と言わんばかりに福原副隊長を睨むが、静かに捜査を見守っている。捜査員は前沢淳一、検事正と秘書室長の村井瑠璃子に手錠をかけた。

六本木ビルは警視庁捜査一課と三課が担当だ。二階三階は昭和建設、大泉捜査一課長が捜査令状を持って突入、大屋社長は不在だったが数々の書類を押収、若宮警部補は四階の畠田智樹弁護士事務所に、素直に捜索に協力す。最後になったが五階と六階の二瓶企画、関係者と思しき二人がいるだけ、捜査令状を示すが、代表の栗橋健明が不在なので困ると言い始めた。大泉捜査一課長はそれがなんだと言い、捜査員に書類を段ボールに詰めるように言い放つ。更に一課長は言う、

「薬物と拳銃、献金と称した現金等々がどっかに隠されている、それを探し出すんだ、必ず出てくる」

捜査員らは書類を段ボールに入れる者と宝探しの二手に分かれた。大泉一課長は留守番役の二人に詰め寄った。

「何処に隠してあるんだ」

と一課長特有の言で迫った。当初は横柄な態度だったが、ハイとか分かりませんとか敬語を使うようになった。このビルも残すはあるとされる宝探しだけに、他の部署は引き揚げさせた。

「さっきの情報では河口湖も終盤を迎えているようだ、こっちも頑張らんな、一息入れ持ち場を変えて搜索しよう、コーヒー冷めんうちに飲もう、皆休憩だ」

大泉一課長が皆に声を掛ける。休憩中に若い村野隊員が一課長に声を掛けた。

「このテレビ、ブラウン管テレビですよ、懐かしく思われますか」

「おいおい、俺はそんな昔の人間じゃないぞ」

「自分はオギャーと生を授かってから、薄い液晶テレビです、この様な木目調な立方体のテレビは、化石にしか思いませぬ」

「化石とはよー言ったな、俺も化石の部類か」

一課長は村野隊員にお道化て言った。

「で、このテレビは映るんだろうか」

「2011年デジタル放送が始まってからはブラウン管テレビは映らない、当時録画されたビデオテープを見るだけかな」

村野隊員は言った。

「それにしても大きいテレビだな45インチと記されている、無論一課長はこの大型テレビを見た事ありますよね」

「電気店や街頭に設置してあるのを見た事はあるが、我が家じゃー、16型が精いっぱいだった。二瓶企画の留守居役、お前らはこのテレビ映っているのを見たことあるか」

と聞いた。

「あつし等は見た事はありません、ビデオもです。代表からこのテレビは骨とう品扱いの大事なテレビだ、触るでねーぞときつく言われています」一課長は宙を見ながらコーヒーを飲んだ。一課長は何を思ったか膝をポーンと叩きいた。

「おい村野」と村野隊員を呼んだ。

「確か電子工学科だったな」

「はい、N大学の電子工学科卒業です」

「よし分かった、この化石となったテレビを動かしてみろ」

一課長の言に村野隊員はきょとーん。

「工学科だろう早く動かしてみろ」

「まずは、後ろ開けてみないことには、それにしても重い移動することさえできさない」

「おい、誰か手を貸してやってくれ」

やっそこ裏側が見える所まで移動できた。

「一課長このテレビ変です、冷却効果を高める為に、裏蓋は穴が空いている

のが普通、だけど蓋は丈夫な金属蓋が使われています、おまけにダイヤル付きです、金庫のようです」

一課長が寄って来て、解錠できるかと聞いてきた。留守居役に目を向けたが、二人は首を横に振るばかりだ。

「一課長、自分がやってみましょう」

と根上隊員が言った。根上隊員はテレビ金庫にとっかかった、無情にも時が過ぎゆく、根上隊員は自分を落ち着かせるであろう、深呼吸の回数が多くなった。三十分過ぎた頃、根上隊員が言う。

「開きました」

と連絡が、皆がテレビ金庫の廻りに集まった。

「よし開け」

の一課長の声、金庫内部が晒された。

一同、おおーと声を発した。

一万円札の札束、白い粉に干し草がぎっしりだ。一課長は本部長に一報を入れた。

カナと栗橋は気を振り絞って争う、力を抜いたほうが負けだ、双方はそう思っているだろう。栗橋とカナは向き合っまま横走りをしている。マキが言った。

「手助けしよう」

ケンジは首を横に振る。

「カナが勝っている手出しは不要」

ケンジは自信を持って言うた。

報道機だろうヘリが一機必要に上空を旋回している、ドローンも三機飛んでいるそれぞれにこの状況を全国に流しているんだろう。

横走りをしていた栗橋がよろけた、カナはすかさずハイキックで後頭部にヒット、栗橋は大きく姿勢を崩した。尚もクロヒヨウは背に胸に後頭部にキックの嵐、ケンジが割って入った。

「クロヒヨウもう良いだろう、これ以上キックすればこやつは死んじまう。敵討ちもあるうが、今は令和の世、法廷へ送り裁判をかけるのが敵討ちだ」

カナのキックを真面に受けたケンジは、脇腹を摩りながらカナに言うとかナは頷いた。栗橋が絞り出した声で言う。

「証拠隠滅用にダイナマイトと煙火が冷蔵庫床下に1000本と50発入っている。もう爆発する頃だ、退避を急げ」

「ケンジ、別荘内には誰かいるか」

クロヒヨウが叫んだ。

「特殊隊員が三名程ダイナマイト探しをしている」

「直ぐ避難だ」クロヒヨウが再び叫んだ。

栗橋が言った。

「あれだけの数ではここも爆風でやられる、避難せにゃーと言いだ動きが止まった」

機動隊やら特殊隊員等は段差方向に駆け出した。

「ケンジ、マキ、クロヒヨウ早く逃げろ」

へりに乗った平成放送の女子アナが、怪訝そうに実況中している。

「何かあったんでしょうか、別荘から皆は離れ始めた。本部からの無線だ、

爆発する離れる」

平成放送のヘリは、半径200mをキープし上空を飛んでいる。爆発直前直後の模様を伝える為だろう、女性レポーターが機の窓から身を乗り出して、マイクを握っているのが確認できる。

本部長と日葵が、マイクで切羽詰まった言い方をしている。クロヒヨウが栗橋を抱え、ぎこちない足取りで別荘から離れた。マキとケンジが手助けに戻ろうとした時、突如大音響と共に爆発した。マキもケンジも爆風に煽られる、カナと栗橋は宙に舞い、マキ達の脇に落ちて来る。カナは栗橋を抱いていた、受け身が取れなかった。左腕を打ったようだ、栗橋は腰を強打した。んだらう全く動けん状態。直ぐ、日葵は救護班を向かわせ、消防隊に放水開始をさせ、テキパキした指示を出した。

焼け跡には大金庫が突っ立っている、金庫精通な隊員呼ばれ、開錠作業開始。金庫は程なくして開錠する、本部長は中を見て唾然とす。数十億は軽いであろう札束と、これまた末端価格数十億の薬物がぎっしり詰まっている。すぐさま都内の突入隊に連絡、捜査に手助けができるよう通告する。

あまりの手際の良さに、山梨県警機動隊員は、皆降参とばかりに次郎に敬礼した。そんな煽り檣沢隊長の電話が鳴った。

「隊長、私だ総監の島原だ」

との声に檣沢隊長は固まった。

「そこには次郎さんと本部長はいるかな、それにマキちゃんにカナちゃんは、それと新人のヒマちゃんは」

「現場検証や後かたづけ中だが、隊員らの行為で一息ついている所で」

「おーそうか携帯をスピーカーにして、皆聞いてくれ」

「執行猶予中の処分でしょうか、その責は二人にはない、あるとすれば命令を発した、私だと」

榎沢隊長は言う。

「隊長、何の事かね執行猶予中とかは、わしやー何も言っとらんぞ、それよりも東都地検と六本木ビル突入は成功したぞ、後ほど隊から説明があると思うが、厚労大臣確保に端を発して前沢淳一、検事正も我々に投降した。秘書室長は拳銃をぶっ放しはした、が今はおとなしいとの事、六本木ビルからは相当数の薬物と現金と拳銃、偽造土地取引書等々を押収した、畠田弁護士は観念していたのだろう、無抵抗だった。それらは河口湖別荘人質籠城事件対策本部の皆さんの活躍があったからだ」

次郎達は黙って総監の話をしている。

「所でさつき執行猶予中とか責任とか言っとった、それは田川健次郎と寺島加奈の執行猶予中の件かな、皆も知っているであろう総監の職権を、今回は世を驚愕させたとされる首謀者達、その確保に著しく貢献したとされ、執行猶予中の犯罪とは見なさない。それとお二方から今朝届いた習字の練習のよな封書は、あれは破棄処分とし破きごみ箱入り、どうだい私の判断は」

「総監ありがとうございます」

隊長はスピーカーホーンに向かい深々と頭を下げた。

「調書作成、告訴状、証拠物件等々、大変なる多き作業があるが頑張ってくれ、では帰路道中気を付けて戻られたし、以上」

と言って総監は電話を切った。

本部長は只今をもつて対策本部解散宣言を発令す。

そんな解散宣言を発令した本部長、村上裕太郎警部をマキは、道着の縫い目に両手を合わせ不動の姿勢、解散宣言発令後父っ様に敬礼す、それを見ていた次郎はこっくりを一つ。

本隊も現場検証を終え帰路に、特殊隊はヘリに乗り上空を旋回し東方へ消える。村上警部を始め三鷹署本隊は、隊列を組み中央道へ入った。BMWは左手を負傷したカナに代わりマキが操縦す、パッセンジャーシートにはヒマが座っている。前後に警察車両に挟まれたBMWは、嫌がらせもなく快適に走行している。村上警部から談合坂で休憩をとると連絡が入った。警察車両に挟まれBMWを停めた。とは言えボロボロな道着姿な三人は目立つ、一人二人とカメラを持って人は集まって来てしまう。署員さんが気を利かせてくれた。

「トイレ休憩に立ち寄っただけです、撮ったら直ぐ移動して下さい」マキとカナにヒマはサービス旺盛、盛んにポーズを取っている。お巡りさんが撮影整理を始めた、撮り終えた皆衆の解散も早かった。マキとカナとヒマは婦警さんに守られているとか、一緒にトイレを済ませた。そんな三人を次郎とケンジはただ見つめるだけ、小隊長が声を掛けて来た。

「次郎さんにも叶わん事があるんですね」
と、次郎は頭を掻き苦笑い。

三鷹署に車列は入った。次郎達も村上警部から形式なりの事情聴取を受けた。二十分の事情聴取を済ませた。次郎は皆に言った。

「汗と埃で身体中ベトベトやないか、深大寺の風呂に行こう、マキとカナは

途中家によって着替えをとりそのまま温泉に直行、ケンジは家に寄る、小生は深大寺に寄って着替えを取りに、そんで温泉へ、日葵はまりが用意している、小生と一緒に、出たらいつぶくに直行」

はいーと言ってマキとカナは先に三鷹署を出る。いつぶくに、メインテーブルには、お亡くなられた方の遺影がセットされている。まりと共にコーヒータイムに来ていた警察官も、口々にお帰りなさい。まりが言った。「ガンさんも手伝ってくれましたサンドイッチ、いっぱい作りました皆で残らず食べて下さい」

まりはそう言って十個の大皿に山と積まれたサンドイッチをテーブルに置いた。週刊平成の早乙女浩二も早々と来てテレビで応援していたと言う。次郎は陰の功労者と称え皆に紹介した。

「故菊田健斗さんの奥様菊田理紗さん、小金井の主婦故大里麻衣さんのご主人と紹介を続けた」

受け持ち曜日ではないがノリも来、祝福に花を添える意味でカラオケをセツトし、シヨウの準備を始めた。ちよつと早いかなとノリは言いカラオケを回そうとした。

「アツ、ノリちゃんともまりは言い皆にお願いをした、大勢様なので確か二回目と想うのだが、今宵は立席でお願いします。その代わりと言っては何ですが、コーヒーとサンドイッチは無料にします。次郎も追加サンド作りを手伝うと言っています」

まりの話が終わるとウオワーと歓声が起こった。ノリが真っ赤なブラウスにチヨウミニで現れた。

「今宵、いつぶくがお送りします歌の数々、いつもの様に、時間の許す限りお楽しみ下さい」

ノリの名調子で始まりを告げた。ひばりは真っ赤な太陽で始まる、チョウミニ故の事だが、見える物は見えないようだ、殿方は無念頻り。カナも左手を庇いつつ津軽海峡冬景色と津軽じょんがら節、天城越えを披露。何故かノリは次郎を引つ張り出し、東京ナイトクラブを、尻込みしていた次郎だが、ノリと見つめ合いほんわかムード。二番は俺だと調布署の交通係長さん、数人が指笛をピーピー。そんなこんなでラストナンバー、好きになった人をノリとカナヒマでのラストナンバーは終わった。次郎は、

「三鷹署は誰もいないな、調布さんをお願いするか、生活安心安全課の岡山智義警部補さんに、本日の締めをお願いします」

次郎の突然の指名で戸惑いを見せた、が岡山智義警部補はスツと立ち上がった。

「無念ながらお三方が命を落とされました。しかしながら大勢の皆さんのご協力と、チームいつぶくのメンバーのお陰で大事件は解決した、最初もよし、中もよし、無論終わりもよしそんな事で三本締めの音頭を取らせて頂きます」

で威勢よくシャンシャンと三本締めを行った。

翌朝次郎たちは村上一課長に呼ばれた。三鷹署に着いた次郎達は応接室に通された、お茶を入れこちらでお待ち下さいと総務課署員は言う。マキとカナにヒマの出立が気になるのか一回二回と見て、出て行く。

少しあって、

「お待ちしました」

と三鷹署新井征十郎署長と、村上一課長が入って来た。

「やー谷端さん否次郎さんと呼ぶのが適しているかな」

「署長さんどっちでも良いです」

「じゃー次郎さんでいくかな次郎さん。早速本題に入ろう、今朝便で本庁から届いた、函館と釧路の殺人事件、麻薬取引、闇献金、不正不動産取引等々、一連の事件を解決に導いた功績は大きい、よって記念品を添えて警視総監賞を送ると言った。で、ここに授与式を挙行する」

署長が言い終わると事務官が表彰状と記念品を持ってくる。

「五人のうち誰でも構わん前に進んで下さい」

「カナ出る、表彰状を受けるに値する。あのライフルを一発づつで吹っ飛ばした、あれがなければ次の行動がとれない、解決も遅くなっていた」と、皆は拍手しカナを押し出した。

表彰状、チームいっぷく殿で始まり、警視総監島原敏之で終わった。

「記念品は本来ジュース一本が相場だが、それとは別に一万円の商品券を添えた。マキちゃん不服か」

「いいえ署長さんありがとうございます」

「良かった、少ないなって言われるんじゃないかとビクついていた。それとチームいっぷくの皆さんに、会いたいと言っている人がいる。是非とも会ってやってくれ、ドア越しに中へと言った」

入って来た面々を見た。一同はあ！つと声を発した。

そこには刑務官に両脇を抱えられた、村井瑠璃子と栗橋健明がいた。

「この両名が、皆に言いたいし聞きたい事がある、そんなな訳で連れて来た、話を聞いてやってくれ」

そう言って署長と村上一課長は応接室を出て行った。

「小生等に何が聞きたい何が言いたい」

二人に言う。僅か沈黙があつて、モゾモゾしていた栗橋が言い出した。

「数々の悪事に加担した俺だ、何言つたつて弁解の余地はない。真剣勝負には女性に負けた、屈辱を味わつたのは事実、しかもケンジさんに止められていなければ俺はどうなっていたか」

と栗橋は言いカナにペコリと頭を下げた。

「俺より猛者はいないと想つておつた、それが無残に崩れた、クロヒヨウさんとやらクロヒヨウさんに勝つ秘訣を教えてくれ」

栗橋はそう言った。

「答えては」と次郎はカナに言った。

カナはだってそんな事はとか、口籠つて言った。数秒於いてカナはいう、
「第一にあなたは、自分より強い者はいないと過信しています、その過信を捨てなければより強くはなれない。第二は訓練と言うか稽古が不可欠、事実マキちゃんと三百六十五日早朝、村上道場で汗を流す日々です。強くなるには今言った事が重要です、しかも邪念があつてはならない、無でなければならぬ、だけど自分を倒すのは簡単な事だ」

栗橋はキョロ付きながら、それは何の事やらと言つた表情をする。

「自分は警視庁特殊隊のテストを男性に交じつて受けた。腹筋やら腕立て伏せ等筋肉運動は男性に負けず劣らず、だけど男性と同等のダンベルやバーベ

ルは、劣りを見せてしまう。柔道と空手は負けなかった、だけど弱いと言うか欠点が見つかった。組まれ動きを止められとどうにもならなかった、男性隊員と対戦する時は、投げを打っては離れ、組み込まれないようにし離れて対戦をした。大柄な男に捕まり逆を取られたら堪ったもんじゃない、蹴りを入れては離れ、パンチを出しては引っ込め、その繰り返しで相手を弱らせた」

カナの話聞いていた栗橋は、キツと口を一文字にしカナに言った。

「何時の日かは分からんが俺のリベンジを受けてくれ」

「相、分かった約束しよう待っている。だけどその時は自分の腕も今以上になっている筈」

とカナは言い服で覆っている栗橋の手に、カナは自分の腕を差し伸べた。

次郎はウンウンと頭を上下に振っていた。

「所で村井瑠璃子さん、小生等に聞きたい事とは」

と村井瑠璃子に向き聞いた。

「次郎さんとやら、これで会うのは三回目ですね」

「そうだな、三回目だ」

「次郎さん、二回目を覚えております、あの夜の事を」

頭を搔きながら次郎はしゃべり始めた。

「美味しい酒とおしゃべり、そこでダンスと楽しかったよ」

「それもあるけど良いムードになり、私がホテルへ誘いかけた時、携帯が鳴り急用が出来たと言って、帰ってしまった」

あれ出来レースだったんでしょ、いかかが」

「それ、答えなきやーならんのか」

「答えられなければ答えなくてもいい、私が今回の事件に絡んでいると思ったの、それは何時頃、参考にとは言わないが教えて、完璧に組んだ今回の流れ、いとも簡単に崩された。どの様にして崩したか教えて」

「良いだろう説明しよう、証拠一つない犯罪、完璧すぎる犯罪、それこそ犯罪大だ、そこいら辺からとつついた」

「だからそれはどの辺から」

「地検秘書室の健斗さんが函館で銃殺された、銃撃者はどっから来て何処へ消えたか。翌日は釧路で東京の主婦が毒殺される、更に八戸の漁船が釧路の岸壁に激突し炎上す。この3件の事件は共通しているだろうか、そのへんから外堀を埋める事にした。釧路空港駐車場で、毒殺された大里麻衣は、東京小金井の主婦で、シヤブのバイヤーと判明、釧路港で激突炎した船は八戸港所属の漁船、ここまでは直ぐ分かった」

「それじゃー他の捜査と同じじゃーない、次郎さんらしくない」

「小生だって分からん事は多い、それが常や」

次郎は記憶を辿りながらの説明だ、喉が渴くのであるろう水を度々口にする、そんな時村上一課長が次郎さんに入って来た。

「北海道より村井瑠璃子を迎えに来てくれました、函館南署の片岡警部補と山崎巡查長、釧路署の大滝修二警部と浅田正平巡查長です」

「やーご無沙汰しています」

と次郎は手を挙げ挨拶す。

双方の警察署で、しっかりと取り調べさせて頂きますと両警部が、次郎に握

手した。マキにカナもヒマも、その節はご協力ありがとうございましたと、遅れてケンジも挨拶を交わす。

「今、別れをしている所です、後僅かながらお待ちください」

と次郎が言った。

「はい、私らは時間があります、お待ちしています」

「では、さっきの続きから行くとすつか、菊田健斗さんの葬儀の折、葬儀場前までベンツを乗りつけ颯爽と歩く姿、モデルさんと見間違える程の秘書室長さんのその容姿、今でも忘れはしません。葬儀の最中だったかな、故菊田健斗さんの自宅に泥棒が入った。金品には目もくれずPcだけを持ち去った、東都地検秘書室勤務の健斗さんが調べた事が、出てしまうと困る人がいる、その為に、証拠隠滅を図ったのではないか、秘書室に何かありと踏んだ」

「その時私が浮かんだんですか」

と村井瑠璃子が聞いた。

「そんな時はまだだが、砂に記されたダイニングメッサージらしき、アルファベットのようなカタカナの様な文字、その時は小生だけに留めておいたが、カタカナのトと漢数字の三とカタカナの小さいヨはヒシヨ（秘書）と読めるのでは、そんな訳で小生は秘書室に目を向けるようになった」

「それで私をマークし始めたんですね」

次郎はすかさず言う。

「その時点では誰かは特定できていなかった」

「では何時頃からだった」

村井瑠璃子が言うのと次郎は宙を見ながら、マキにカナ、ヒマ、ケンジを見

て、函館署に釧路署の皆さんを見、しゃべり出した。

「小生には、お陰様で多くの協力者さんがいる。自然と情報が集まって来る、釧路の毒殺事件が発覚した前夜だが、馴染みの警察官から連絡が入った。

「姪っ子が釧路空港でG Aをやっている、これが推理小説の大ファンだと言う、彼女が東京行き最終案内をしていると、アラフォーだったか、

長身でサツサつとモデル歩きをし、ゲートを抜けた。その女性が香水を撒き散らしていた、廻りの席の乗客さんは如何しただろうか、翌日、ランチをしに馴染みの店に、ここは機長さんも整備士さん、も空港で働く人たち皆が食事する場所です。そこで仲のいい店員さんが注文を取りながら話しかけて来た。昨夜、香水きつめのモデルさん否モデルさんの様な女性が見えました、ビールを飲み煙草を吹かし食事をしていった。ティッシュで口を拭き丸めて灰皿に、ポッケからはがき大の油紙の様な物を出し丸め同じく灰皿に、灰皿の中は二本の吸い殻とそれらで一杯になった。その女性は席を立ちレジを済ませる外に、

「とまーここまでは極一般的だが次郎さん聞いてくれ」

とガキさんは言った。

「ガキさんとは馴染みの警察官でだよ、次郎さん、コレクションもいろいろあるが、コレクションと言えるかな、仲のいい店員さんがモデル風な女性が残した灰皿の中身を保管したと言う。ふつう思うに、うひゃと想うのが普通。

その店員さんは、地方空港とは言え有名人も多い、店も黙認しているだろう、使ったティッシュや割りばし等何でも保管していると聞く。そんな話を聞いた姪っ子は、毒殺事件の夕食時の事、ましてや付き人も見られない、香水多き

モデル風な女性の使用物、事件に関係ありと睨んだ。すぐさま次郎さんに連絡とった。釧路署の大滝捜査一課長に持ち込み鑑定を依頼してくれ、小生から連絡を入れておく、そうしたら指紋やら血液鑑定等いろいろやってくれた、ここで小生の黒目が大きくなった。油紙があったと言ったがその油紙から薬物反応が出た。この紙で薬物を包んでいた、そう小生は判断した。東都地検へ指紋等を取り寄せ要請すると共に、顔写真だ、写真をFAXした。コーヒー一杯終わらん内に返事が届いた。紛れもなくモデル風な女性は村井瑠璃子だ、毒殺事件の日、村井瑠璃子は釧路にいた」

「そこ迄分かったなら何故その時逮捕はしなかった」

「室長さんもご存じでしょう、逮捕には状況証拠だけでは不十分な事を、逮捕は出来なかった、しかし自分には頼りになる仲間がいる、彼らが手伝ってくれ証拠固めをした。警察手帳を持たなく、危険を冒し探りを入れた、北海道にも行ったそんで証拠を掴んだ。余談だが室長さん、ご存じと思う、部下は叱るだけではダメ、褒める事を忘れてはならない、又、部下が掴んだ情報は部下の物にせにゃーならん、タメ口は慎むべし、部署内は家族と想うべし等々しとつたら、何時しか部下と小生の距離は縮まり、付いて来てくれ土気も上がった」

室長は次郎の話が分かったのか、ふてぶてしいのか黙って聞いているだけ。次郎は話を続ける。

「小生、手前味噌は嫌いな言葉の筆頭、だが言わしてくれ自慢話を、今喋った事を部署内、他部署と日々接していた。そんで信頼関係が出来上がった、今回も三警察署の皆さんが、積極的に協力され証拠固めに尽力された。部

下とは真摯に向き合い信頼関係を築くのが必要」

「次郎さん、手前味噌をよーお話しされましたね」

と室長は言った。

「言いたい事があるんなら、遠慮なく言ってくれ、否定も肯定もせん、小生は市民の安全と真実にある。同僚や部下には思いやりは多大だ、しかし上司には厳しかった。その結果階級は警部留まり、が小生には全国の警察官が付いているのも同然です。室長、如何にとらえようが構わん、それこそ手前味噌と言われても構わん、この位でいいかな」

「次郎さん、良ーく分かりました、そんな素晴らしい、おまわりさんに逮捕され光栄に想います。だけど次郎さん、もう会えないかもしれない、だけど会えたとしたら、もっと綿密に犯罪計画をし実行します。その時は宜しくね」

「そんな時はそんな時、だけんど室長さん、学生時代はモデルをひとつと聞いている。卒業後は結婚もあつたが何故にモデルを辞めてしまったのか、モデルと言えば皆憧れの職業だ、何故にそのままモデルを続けられなかったのかと小生は思う、悪事に手を染めなくても良かったのでは、八戸の親御さんも、喜んでいただっだろう。」

地検の激務を熟す、上司からはちやほやさされ、一日が終わってみれば淋しさだけが残り、何時しか酒と男で淋しさを紛らわす様になり、悪事に染めてしまった、小生は残念頻りです。皆、辛い歯を食い縛って日々を過ごしている、仕事を熟し家庭を守っている。それが常だ、娘を信じて、帰りを待っている八戸の親御さんを何とす」

次郎にしては珍しく、語尾上がりに声を荒げた。

次郎の頬に熱い一筋が、他人に見つからんよう天井を見つめた。黙って座っていたマキが、この野郎とばかりに立ち上がり進み出て言った。

「親をなんとす。親を大事にし、持ちつ持たれつつ仲良く暮らし行くのが自然体だろう」

村井瑠璃子は口を真一文字にし、キツとしマキを睨んだ。僅かして刑務官に両脇を抱えられ出て行く、次郎は皆に聞こえんように言った、疾風のルリ、グッバイ&シーユーアゲイン。